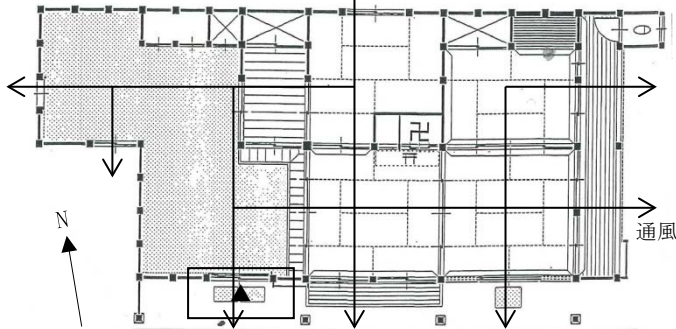


引戸と扉の比較と評価

A. 引戸系

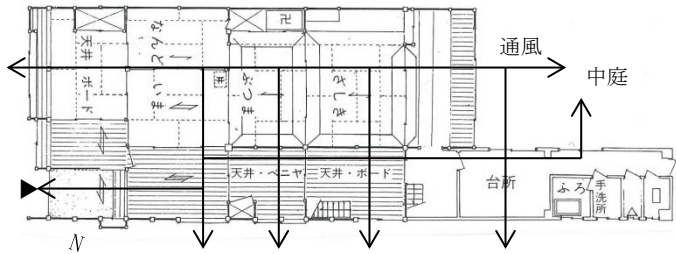
B. ドア(扉)系

A1. 松戸市の伝統民家の間取りと引戸例



座敷と土間で構成され、柱間はすべて引戸式。各部屋の独立性は保ちにくい、状況により引戸は開け放つことができる。

A2. 三国町の町家の間取りと引戸例



間口が狭く、深い奥行き町家の例。通り庭(板の間)に並行して各室が配され全て引戸である。

通風 ←→ 換気 ←→

生活のしやすさは、建具の方式に左右されるため、「引戸」と「扉/ドア」の比較をする。

●比較と相違点

A. 引戸系 各室の連担性を優先する住まい

近代化以前の日本の住まいは柱や梁の軸組みを活かし、柱と柱の間は壁や建具などで、空間が分節されている。開口部の面積が大きく確保されることが特質で、建具類が大きな役割をもつ生活が展開した。普通、単位空間相互(部屋や廊下や通り土間等)の境界で建具が左右に移動し、また複数の引戸をすべて引きこむことも可能である。大きい採光面積と通風機能が確保できる複合的性能をもち、家屋構造、気候風土、生活様式に適合した合理性を住まいにもたらした。近世には町家などにおいて様々な引戸意匠も展開がみられ進展した。

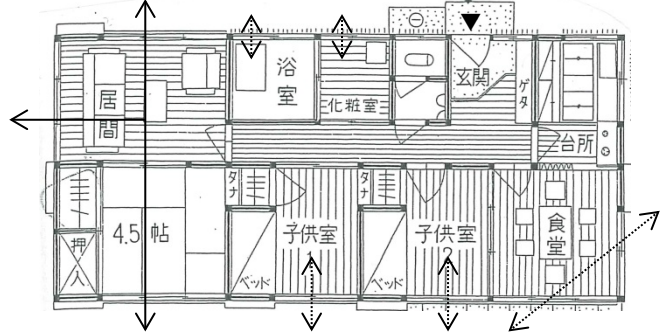
A1: 千葉県松戸市の明治10年前後に建てられた主屋の平面図である。桁行6間半、梁間4間の伝統的民家で、田の字型の座敷と土間の構成は房総農家建築に共通する基本的なものである。通風性が東西南北に見込まれ、季節や朝夕の変化に期待できる。

A2: 福井県三国町の船持ちの町家である。このような間口が狭く奥行きが深い町家も引き戸により風洞としての流れが期待できる。室内動線は、各部屋とも2方向性をもつが、建具で仕切られるため、個室性は希薄になる。

B. ドア系 各室の単独性が高い住まい

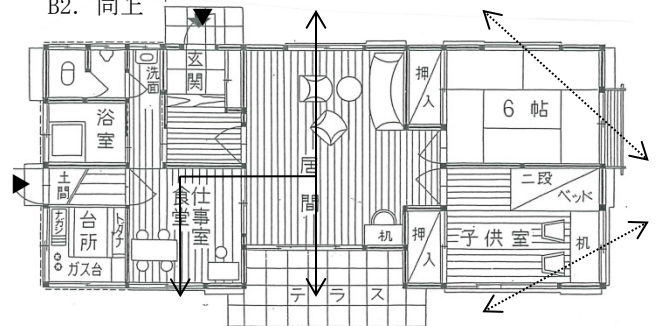
「引戸」から「ドア」への普及は、戦後の高度成長期における都市型居住の急増と住宅生産の工業化とが複合的に作用し、生活観やライフスタイルに変化が生じ、その結果個室志向が進展したものと解釈できる。

B1. 住宅金融公庫選定の間取りと引戸例



中廊下式で全室ともドアで仕切ることができるので独立性が高い。基本的には、開けたままでは暮らしにくく、閉めた状態では通風性が失われる。

B2. 同上



居間中心式でドアによる各室の独立性を確保している。居間と食事室は引き戸で「開」をもたせている。

「ドア」は出入り口としての単一機能であり、規格品の建具を丁番金物で取り付けることで、量産化と標準化、現場工事の省力化とコスト低減に貢献するアッセンブリー工法が普及した。ドアは戸当たりの気密性は有利であるが、反面丁番による回転軌跡が必要となる。またドアを「開」の状態に放置することに障害感があり、通常「閉」の状態になる。引き戸が連続性の高い一室空間化を志向するのに対して、ドアは個の空間を確保し、部屋単位の独立性や空調等の個別制御に有効性が高い。またB1, B2ともドアが閉じた状態では、2方向性を前提とした「通風」とは異なる「換気」と見なした。

B1: 高度成長期における住宅金融公庫の選定モデル住宅の例である。その中から「ドア」方式と個室化の兆候が明確に表れた平面図を例とした。中廊下式は戦後に浸透したものではないが、各室への出入りを廊下側から取り、片開きドアをつけることで、各室の独立性を高めている。引戸も可能なので他の事例では、引戸もあることを付記しておく。

B2: 居間から各室への出入りができるプラン。上図と同様、各室は片開きドアで区画され独立性が確保できる。

【指針】伝統民家の建具方式は、基本的には自然素材による引戸を活用する。ドアと引戸の比較は、コストと機能(通風性・利便性)に集約される。コスト面のアルミサッシか木製建具かの比較による選択は、部位別に調整が可能である。また、機能面の通風は立地環境の利点を活かした引戸が有利であり、同時に開閉システムの使い勝手からも引戸方式を優先的に導入する。

図: A1 松戸市民家調査報告書(1995)
A2 三国町の民家と町並(1983)
B1, B2 木造住宅平面図集・住宅金融公庫選定(1964)